東日本大震災
教育復興支援レポート
2017

公益社団法人
日本ユネスコ協会連盟

子どもたちの未来のために

東日本大震災から7年が経過しました。

改めて大震災で犠牲となられた方々に深く哀悼の意を表しますとともに、いまなお不自由な生活をおくられている皆さまに心よりお見舞いを申し上げます。

被災された地域では、津波被災エリアに盛り土でかさ上げをして、市街地の再生へ向けて年々新しい町づくりが進んできています。子どもたちを抱えるご家庭でも、高台などの防災集団移転区域に住宅を再建されたり、仮設住宅から復興公営住宅に転居されたりと、住まい確保への動きが大きく進みました。

一方で、町の経済や産業の振興には、まだまだ時間が必要と思われます。さらに、原発事故の影響で避難を余儀なくされているご家庭の中には、故郷での生活が叶わず、避難先の土地で新生活を始めているご家庭もあります。そのような中、育ち盛りの子どもを抱えるご家庭では、現在も家計の回復と教育費の捻出に懸命に努めておられます。

日本ユネスコ協会連盟では、2017年度も全国の皆さまからの温かいご寄付をもとに、被災地の子どもたちに返還不要の奨学金を届けてまいりました。これまでの7年間で、4400人を超える子どもたちを支援することができました。ご協力いただいた皆さまに心より御礼申し上げます。

当協会連盟では、これからも子どもたちが夢や進学をあきらめることなく、安心して学校に通えるよう、支援を継続してまいります。

今後ともお力添えを賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

公益社団法人　日本ユネスコ協会連盟

会長　大橋洋治

目 次

私たちが7年間で取り組んだこと ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 01

ユネスコ協会就学支援奨学金 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 02

奨学生のいま　～奨学生インタビュー～ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 03

「留学を体験し自分と向き合って学んだこと」相良ひとみさん ・・・・・・・・・・・・ 04

「陸上も勉強も精いっぱい頑張っています」三浦隼人さん ・・・・・・・・・・・・・・ 05

「大好きな英語をもっと学んで仕事にも生かしたい」山本美鈴さん ・・・・・・・・・ 06

「観光で地域を元気に。そしていろいろな人と関わりたい」桂川映美さん ・・・・・ 07

「気仙沼のおいしい海産物で地元の役に立ちたい」松野ルミさん ・・・・・・・・・ 08

「船が好きだから、生まれ変わった町で海洋について学ぶ」菅野慶次郎さん ・・・ 09

子どもたちから、ご家庭から、「ありがとう!」 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10

被災地のいま ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

東日本大震災子ども支援募金

私たちが7年間で取り組んだこと

学校への緊急物資支援

2011年度完了

学校を再開するために、まず行ったのが緊急物資支援でした。被災により学習に必要な備品が流出してしまったため、144校・2教育委員会に対し、学校のニーズにあわせて、教材類や体育用具などの支援物資を届けました。また、仮設住宅や避難所と学校をつなぐスクールバスも支援しました。

文化・郷土芸能への支援

2011年度～2013年度完了

震災によって危機に瀕した東北の祭り・文化を救ってほしい――。被災地の声を受けて、失われつつある日本の自然・文化を未来へ伝える「未来遺産運動」の一環として、人びとの気持ちをつなぐ郷土芸能や祭りへの物資支援を実施しました。

心のケア支援

2011年度～2015年度完了

地震と津波への恐怖から強い不安を抱いている子どもたちの、心理的ストレスをやわらげるために、夏休みにキャンプや絵画コンテストなどを実施しました。

社会教育・コミュニティ支援

2011年度～継続中

被災地では、仮設住宅で暮らすなど、生活環境が大きく変化しました。被災地のコミュニティ再生を目指して、コミュニティ図書館、学童保育所、移動図書館車、相撲場などを支援しました。

ユネスコ協会就学支援奨学金

2011年度～継続中

経済状況が悪化したご家庭の子どもたちが安心して学校に通えるように、返還不要の奨学金を3年間にわたって支援する活動を行っています。

>> 2017年度の活動・・・P2～13

MUFG・ユネスコ協会 東日本大震災復興育英基金

2011年度～継続中

両親もしくはいずれかの保護者が死亡・行方不明になってしまった子どもを対象に、給付型の奨学金を支援しています。その他、TOMODACHI・MUFG国際交流プログラムを通じ、子どもたちの心豊かな成長を応援する支援を行っています。

>> 2017年度の活動・・・P14～15

アクサ ユネスコ協会 減災教育プログラム

2014年度～継続中

東日本大震災の経験や教訓を全国の学校防災につなげるために、学校への活動助成、教員研修会、実践報告会を実施しています。

>> 2017年度の活動・・・P16～17

概要

対象者
津波による家屋の流失・損壊や原発事故による避難などの理由で経済状況が悪化した家庭の、高校進学を希望する中学3年生。※震災による遺児・孤児を除きます。

対象地域
岩手、宮城、福島の3県で、被害の大きかった市町村を特定して実施しています。

給付金額と期間
奨学生1人当たり月額2万円を3年間給付します。（中学3年次から高校2年次まで）
※奨学金は、子どもたちのご家庭に直接支援しています。 ※返還不要の奨学金です。

2017年度の支援

2017年度は、2015年度と2016年度に採用した奨学生への継続給付を行うとともに、
陸前高田市、石巻市、気仙沼市で奨学生の新規採用を行いました。

受給者数 593名

2017年度奨学金給付額 1億4388万円

支援地域
岩手県／陸前高田市　宮城県／石巻市、岩沼市、気仙沼市、多賀城市、亘理町
福島県／大熊町、新地町、富岡町、浪江町、双葉町

2011～2017年度までの累計受給者数 2956名

奨学金は、それぞれのご家庭で子どもたちの高校進学に必要な費用や学校生活のために、大切に役立てられています。

ユネスコ協会就学支援奨学金の活動はホームページにも掲載しています。 http://www.unesco.or.jp/kodomo/

case.2

case.1

case.3

奨学生のいま ～奨学生インタビュー～

震災から7年を経て、進捗の差はあれ、被災地は活気を取り戻しつつあります。
しかし、各家庭に目をやると、失った家や仕事の立て直しなどで、まだまだ苦労の絶えない現実が見えてきます。
そんな多くの家庭の子どもたちを、これまで継続して支えてきたユネスコ協会就学支援奨学金。
今年も、家族とともに震災を乗り越え、生き生きと夢を語る奨学生たちのいまをお伝えします。

※奨学生や家族の名前は仮名です（P9を除く）。学年は取材当時のものです。

case.5

case.4

case.6

case.1

部活はバスケ部。「小柄だから試合中に何度も飛ばされますが（笑）、楽しいです」

留学を体験し自分と向き合って学んだこと

相良ひとみさん（仮名）
福島県会津若松市　高等専門学校2年生

東日本大震災が起こったとき、相良ひとみさんは双葉郡大熊町の小学4年生でした。直後の福島第一原子力発電所の事故により、町民全員が避難を余儀なくされ、以来ひとみさん一家も避難生活が続きました。そのストレスで、最初の1年は体調を崩してばかり。食事が喉を通らず、学校にも行けなくなったそうですが、7年が経ったいま、だいぶ心の整理がついてきたといいます。

「大熊町は自然がいっぱいで、子どものころはいつも外で遊んでいました。それと、梨がおいしい（笑）。去年の春、震災後初めて自宅に戻ったのですが、庭は草ぼうぼうで変わり果てていて…。それを見ても落ち着いていた自分が不思議です。でも、ずっとここ（大熊）にいたいなあと思いました」

人のいなくなった大熊町は、いつか忘れられてしまうのではないか。そう思うと悲しくなる、とひとみさんはいいます。

自分にできることを一生懸命

大熊町のこともあり、復興についてほかの国でも考えてみたい。そんな関心から、ひとみさんは昨年の夏、2015年に大地震があった被災国ネパールに4週間留学しました。書類審査と面接に合格し、文部科学省が官民協働で取り組む留学支援プログラムに参加したのです。

「私は震災の被災者ですが、いまは住む家もあり学校にも通えています。でも、ネパールではいまだに学校に行けない子がいたり、崩れかけた家に住んでいたりと、復興が遅れている。その理由を知りたかったのと、少しでも子どもたちの心のケアができればいいと思って応募しました」

現地では、アンケートをとったり、首都カトマンズの学校を訪問したりと充実の日々。ところが、ひとみさんはここで大きな挫折を経験することになります。

「学校訪問では、外国のボランティアの人たちと行動していたのですが、皆は英語がペラペラなのに、自分はうまく話せない。何か頼まれても理解できない。自分は全然ダメだと自己嫌悪に陥って、一度すごく泣いてしまったんです」

学校の勉強では、とくに英語に力を入れてきたひとみさん。昨年は英検2級を取り、今年は準1級を目指すなど、ずっと頑張っています。それでも初めての海外で落ち込んでしまったとき、救いとなったのは、仲間と父の言葉でした。

「『あなたの英語はちゃんとできている。自信を持って大丈夫だよ』って仲間にいわれて。それを父にメールで伝えると、『カッコつけなくていいし、自分にできること、やりたいことをどんどん追求しなさい』と。それで、小さいことでも自分にできることがある。それを一生懸命やろうと思えるようになったんです。この留学でいちばん大きな学びでした」

留学前は、些細なことでもよく落ち込んでいたそうですが、この経験を通じて精神的に強くなれたといいます。

ひとみさんの趣味は絵を描くこと。ネパールでは、校舎に絵を描いて子どもたちの喝采を浴びました。また、お世話になったボランティア仲間に、お別れに似顔絵を描いてあげたら、涙を流して喜んでくれたそうです。

「絵って、こんなに力があるんだなあ、とますます自分に自信が持てるようになりました」

留学体験で一回り大きく成長したひとみさん。大学では途上国への国際貢献について学び、将来はよりよい復興や開発について考える仕事に就きたい、と夢を話してくれました。

「私は精神的に弱いけれど、皆さんが応援してくださるおかげで、ひとつずつ、少しずつ、壁を乗り越えられています。いつか夢を達成して、恩返しができたらいいなと思います」

ネパール留学では、学校の校舎に世界中の人たちが手をつないでいる絵を描いた。子どもたちに囲まれて

case.2

陸上も勉強も精いっぱい頑張っています

三浦隼人さん（仮名）
宮城県石巻市　高校1年生

走るのが大好き。「朝練には間に合わないので、ときどき自主的に走ってから学校へ行きます」

三浦隼人さんが通うのは、東北でも名高い陸上の強豪校。隼人さんはその陸上部に所属しています。陸上を始めたのは小学2年生のとき。兄の魁斗さんが短距離を走っていたので、同じスポーツ少年団に入ったのがきっかけです。そして、中学に入ると迷わず陸上部へ。

「中学では長距離と800mを走っていました。駅伝も走り、地区大会では5連覇を果たし、3年のときには大会新記録で優勝しました」

その実力を見込まれて、高校から声がかかったのです。全国といわず、海外からも優秀な人材が集まるだけに、入学したころは練習についていくだけで大変だったとか。中学に引き続き、高校でも長距離を走っていますが、少しずつタイムを上げており、次は800mも走りたいと意欲を見せます。

走ることが大好きで、ずっと走り続けたいという隼人さん。とはいえ、陸上一色にはしたくないといいます。

「勉強もちゃんとしたいと思っています。放課後、練習が終わって家に帰るのは8時とか9時ですが、それでも夕食の後、30分は必ず机に向かうようにしています。眠いときもありますが、楽しくなるともっと長く勉強します」

高校では進学コースを選んでいるため、陸上部との両立は大変です。また、陸上部の多くが寮生活で、6時からの朝練に参加できますが、電車通学の隼人さんは始発電車で行っても朝練には間に合いません。それでも、自分にできる限り、陸上と勉強を精いっぱい頑張っています。

いろいろな人と出会って話したい

母の琴美さんは美容師をしています。自宅兼美容室は地震と津波で被災し、しばらく再開できずにいましたが、昨年ようやく小さな店を借りることができました。シャンプー台から椅子まで、店の備品の多くは大阪の美容師グループから寄付されたものです。また、ハサミなどの道具は、津波に浸かったものを洗って使用しているそうです。

「冷蔵庫などの家電製品は仮設住宅で暮らしていたときに支給されたものですし、いまの暮らしも店も、いろいろな方からのご支援で成り立っています。震災から7年経ったいまでも、気持ちがふっと引き戻されることがあります。そんなとき救いとなるのは、いろいろな形で支援してくださる皆さまの想いです。就学支援奨学金も息子の教育資金に充てさせていただいており、感謝してもしきれません」

「陸上部にも海外の生徒がいます。英語を勉強して、いろんな国の人と話してみたい」

生活再建にはまだまだ道半ばですが、隼人さんには「安心して、好きなことを自由にやってほしい」と願っています。

そんな母を気遣いながらも、のびのびと育っている隼人さん。学校でいちばん楽しいのは、いろいろな友だちと話をするときだそうです。

「人とコミュニケーションをとるのが好きなんです。だから、英語も話せるようになりたい。そうすれば、違う文化の人たちと出会って話ができるから。海外にも行ってみたいです」

高校卒業後は、進学も考えていますが、いまは消防士を目指そうと思っているとか。

「人を助ける仕事がしたいです。震災のことはもうあまり思い出しませんが、当時は大変な状況のなか、消防の方や自衛隊の方が一生懸命、活動していました。そういうことで人の役に立てるのは素晴らしいと思います」

人が好きで、好奇心旺盛な隼人さん。これからどんな人と出会い、どんな人生を切り拓いていくのか。まっさらな未来が広がっています。

case.3

大好きな英語をもっと学んで仕事にも生かしたい

山本美鈴さん（仮名）
福島県福島市　高校2年生

病気が再発しないように、あまり無理をしないよう気をつけながら勉強を頑張っている

「いまはもう、すっかり元気になりました」と笑顔で語る山本美鈴さんは、市内の高校に通う2年生。1年前、インフルエンザがきっかけで高熱が続いたため、いろいろな検査を重ねた結果、免疫系の難病ではないかと診断されました。入院をし、学校も2ヵ月ほど休みましたが、その後、自然に回復してきたそうです。

震災のときは小学4年生。双葉郡浪江町で被災した後、原発の事故により、二本松市の体育館から岳温泉、仮設住宅、福島市の借り上げ住宅と、一家は各地を転々としてきました。復興住宅に移ったいま、ようやく落ち着いた暮らしができるようになったといいます。病気になった原因は、これら震災によるストレスとも考えられるとか。

「辛くても、あまり外に吐き出さないタイプだとよくいわれます。いつも我慢していたからかもしれません」と美鈴さん。

女手ひとつで働きながら子育てをしてきた母の芙美子さんにとって、この7年はあっという間だったといいます。

「私も無我夢中でしたが、子どもたちも一生懸命、頑張ってくれました。ただ、美鈴が病気になったときは、生きた心地もしませんでした。幸い自然に回復しましたが、少しでも元気がないと心配になってしまいます」

美鈴さんの姉、美佳子さんも、避難生活の中で不登校になったことがあります。震災以来、親子3人は、目に見えない苦労をひとつひとつ乗り越えてきました。そしていま、美佳子さんは希望する大学で学び、美鈴さんも希望校に入学し、新たな友だちもたくさんできて、充実した学校生活をおくっています。

夢はどんどん膨らんで

美鈴さんがいまの高校を選んだ理由は、とくに英語教育に力を入れているから。英語のほかに好きな科目は？ と尋ねても、「英語がいちばん好き」と答えるくらい、英語を熱心に学んでいます。

「中学のときの英語の先生がユニークで、授業がとても楽しかったんです。それで、英語が好きになりました」

中学時代に住んでいた二本松市では、英語のスキット（寸劇）大会で見事、優勝。高校1年のときも、スキットの全校大会で優勝したほどの実力です。大学進学を希望しているので、高校では特別進学コースを選び、英語だけでなく毎日、勉強に励んでいます。

「浪江の友だちとも二本松の友だちともバラバラになったけど、
いまは、ここ福島市で友だちがたくさんできました」

「大学では英文科に進んで、できれば英語以外の言語も学んで、留学もしてみたい。そして、ファッションに興味があるので、英語を生かして、日本と海外をつなぐバイヤーなどの仕事をしてみたいです」

美鈴さんの思いはどんどん膨らみます。

「娘たちが巣立っていくのは寂しいし、経済的にも厳しいですが、震災でいろいろな苦労をさせてしまったので、それをバネに自分のやりたい方向へ進んでほしいです」と芙美子さん。その一方で、支援への感謝の思いは常にあるといいます。

「避難生活を続けていると、どうしても孤独な気持ちになってしまいます。でも、さまざまなご支援を通して、気にかけてくださる方がいると思うだけで、すごく心強いです」

美鈴さんは、浪江の自宅へはまだ一度も帰っていません。

「こちらの暮らしが落ち着いてしまって、帰りたい気持ちは薄れてきたかな。でも、浪江は私にとって大事な場所です」

ふるさとの思い出を胸に、のびのびと学び、大きく夢を描く美鈴さんです。

case.4

部活は軽音楽愛好会。「ボーカルを担当していて、文化祭や松島のイベントで演奏しました」

観光で地域を元気に。そしていろいろな人と関わりたい

桂川映美さん（仮名）
宮城県多賀城市　高校2年生

映美さんは高校の観光科で学ぶ2年生。観光科を選んだわけは、住み込みで仕事を学ぶホテル実習がおもしろそうだったからです。
「表から見えないところが気になる性格で、ホテルの裏側でどんな仕事をやっているのか体験してみたかったんです」
住み込みでほぼ1ヵ月。実際はとても忙しく、わからないことを「わからない」といえず、失敗して怒られたことも数知れず。ただ、仕事は大変でしたが、客室の整備や片付けなど、宿泊客一人ひとりのことを考えて細やかに作業をすることで、身についたことはたくさんあるといいます。
行動的な映美さん、観光科ではガイド実習にも力を入れています。松島の牡蠣祭りで司会運営を手伝ったのが好評で、それからいろいろなガイドを経験するようになりました。
「松島をはじめとした地元の観光地を、県外の修学旅行生などにガイドします。観光地について調べると、自分の知らないことが学べるし、それを人に伝えていけるのが楽しいです」

母への思いを胸に

映美さんの家族は、以前は宮城県女川町に住んでいました。でも、震災で母が営む店と自宅が全壊し、町はほぼ壊滅状態に。だから、観光によって宮城県と地域を元気にしたいという思いが、映美さんの気持ちにはあるといいます。
母の史織さんは、末っ子の映美さんが2歳のときから、女手ひとつで5人の子どもを育ててきました。毎日寝る間も惜しんで働きっぱなしだったところへ、震災が起こります。すべてを失いましたが、いまは多賀城市に移り住んで、トレーラーハウスで飲食店を始めました。
「震災のときに義援金をいただき、たくさんの方に支えられていると知りました。そのお礼をしたくて、自分に何ができるか考えてみました。それで、皆さんに喜んでもらえるように、心を込めて料理をつくろうと思ったんです」
避難所で子どもたちに何が食べたいか尋ねたとき、「お母さんの料理が食べたい」といわれ、その言葉も、お店を始める原動力になったといいます。

上の兄弟は次々と巣立ち、いまは映美さんと史織さんの二人暮らし。母を思う映美さんの気持ちは人一倍です。
「ある日、電車に乗っていたとき、母が手すりにつかまっていたんです。その手がすごくひび割れていて…。苦労をかけているなと思ったら、涙が出てきました」
一方、史織さんは映美さんに大きなエールを送ります。
「こうやって二人になると、映美はなおのこと私を守ってくれようとします。でも、このまま天真爛漫に自分の道を切り開いて、好きな道を歩んでほしい。願うことはそれだけです」
そんな思いを胸に、映美さんの好奇心は広がります。授業やガイド実習などの空いた時間にはアルバイトをし、お金を得る大変さも知りました。実習もバイトも、嬉しいことも辛かったことも、やってよかったと思えるものばかりです。
「いろいろな人と関わって、私の知らない人生について聞いてみたい。そして、ひとつの考えに囚われない、幅広い考え方のできる人になりたいです」
将来は、身のまわりの電気機器などがどうやってできているのか、どういう人たちがつくっているのか、製造業の人たちと関わり合いながら、それを人に伝えるような仕事に興味があるとか。
「いつか私も、自分たちの日常の生活をかたちづくる一人になりたいです」

松島と同じ日本三景のひとつ、京都府の天橋立で出張ガイドをする映美さん。
「松島の素晴らしさを皆さんに紹介しました」

case.5

「もうすぐ仮設から新しい校舎に移るのが楽しみです」

気仙沼のおいしい海産物で地元の役に立ちたい

松野ルミさん（仮名）
宮城県気仙沼市　高校1年生

「海に関する基礎知識を幅広く学ぶ水産海洋基礎の授業が、いま一番面白い」という松野ルミさんは、高校の産業経済科で食品の加工や宣伝などについて学んでいます。
「地元で獲れる食材のことや、その加工と販売など、水産について学んだら将来に活かせると思って…」
被災地の例に漏れず、気仙沼も人口が減り、震災前に比べると活気がなくなっています。そこで、海産物加工の仕事に就いて地元の役に立ちたい、という思いがあるといいます。もちろん気仙沼の海産物はルミさんの大好物。
「中でもサンマはトップです（笑）。獲れたての刺身と塩焼きは、本当においしいですよ」
父の忠洋さんは食品梱包材を扱う会社で働いており、納品先から鮮魚や加工品をよくいただいて帰ります。そんなことも、食品加工業が身近になった所以でしょう。
「2年や3年生になると、缶詰をつくったり、自分たちでレシピを考えて加工したりといった実習があるので、いまから楽しみです。学校の文化祭でも販売するようです」
水産海洋基礎のほかに、好きな学科は数学。もともと苦手でしたが、中学のときに尊敬できる先生と出会い、数学が好きになったそうです。そのせいもあって、将来は学校の先生にも憧れているとか。いろいろなことに興味のあるルミさん、部活は写真部に入りました。小さいカメラを買ってもらい、出かけるときにはいつも持ち歩いています。
「昨日は、卒業した中学の部活（吹奏楽部）を応援に行って撮影したし、先日はテニス部の大会のようすを撮影しました。カメラを向けると、みんないい表情になるんです」
1年前、家にやってきた“わさび”という名の猫も、よく撮影するそうです。

震災を未来へつなげていく

震災後の6年間、ルミさんの家族は仮設住宅で暮らしてきました。中古の住宅に移り住んだのは、つい昨年のことです。
「いまの家に引越してみると、仮設は狭かったなあと思います。やっと自分の部屋が持てました」
ルミさんの通う高校も、震災以来ずっと仮設校舎でしたが、この夏、ようやく新校舎での授業が始まります。震災のとき小学2年生だったルミさんにとって、瓦礫からの復興はずっと当たり前の風景でした。
「小さいころから工事をやっている中で育ったので、それが普通だと思っていました。ほかの町を見て初めて、工事をしていないのが普通なんだと気づきました。でも、どんどん建物や町ができていくので、復興している実感はあります」
昨年、地元新聞に掲載された作文には、震災を体験した自分を受け入れ、未来へつなげようとする思いがにじんでいます。「命さえあれば何でも何度でもやり直せる」。その教訓を「後の世代へ語り継ぐ使命」ととらえ、震災があったからこそ大切な出会いがあったと綴ります。
リボンが可愛らしい高校の制服は、今年度からデザインが新しくなったものです。
「この制服も、皆さまに支援していただいた奨学金で買ってもらいました。とても気に入っています。3年間大切に着よう、と入学したときに決めました」
地元への思い、さまざまな人との出会いが、ルミさんの足もとをしっかりと照らしています。

「子どものころから気仙沼のおいしいお魚を食べて育ちました」

case.6

「小さいころから絵を描くのが好きで、船の絵もよく描きます」

船が好きだから、生まれ変わった町で海洋について学ぶ

菅野慶次郎さん
岩手県陸前高田市　高校1年生

「子どものころは鉄道が好きだったけど、いまは船が好き」という菅野慶次郎さんは、陸前高田市の高校1年生。船に乗ってみたいから、将来は漁業の仕事を目指そうと、高校の海洋システム科で学んでいます。

「海洋基礎という授業は先生が面白くて、海洋生物や船のこと、漁業で使う道具、気候についてなど、基礎的な勉強をしています。そういうこと全部が楽しいです」

いまは普通科と同じ授業も多いのですが、2年生になると海洋関係の授業が増えるとか。船に乗って作業をするような実習も始まるので、慶次郎さんはいまから胸を躍らせています。海洋システム科は定員が少なく、1年生はわずか9人。

「ちょっと寂しいんですけど、9人で力を合わせて頑張ろうといっています。チームワークはいいですよ」

高校在学中に、小型船舶の免許のほか、ダイビングの資格などもとりたいと意気込む慶次郎さん。ただ、泳ぎが得意ではないため、水泳部に入部しました。水泳部でもクラスでも、一番楽しいのは友だちといるとき。休み時間には普通科にまで行って、いろいろな友だちとおしゃべりするそうです。

そんな慶次郎さんが、友だちと離れ離れで「とにかく悔しかった」という出来事がありました。

ゼロから頑張る父を見て

7年前、東日本大震災で陸前高田が津波にのまれたとき、慶次郎さんは仙台市内に住んでいました。当時は小学2年生。

「陸前高田から引越して間もないころだったので、学校には慣れないし、高田の親類や友だちは心配だし、地震は怖いしで、すごく不安になりました」

幸い友だちは皆無事でしたが、慶次郎さんには、何もできず悔しかった思いだけが胸に残っています。それだけに、数年後、陸前高田に戻ったとき、一番嬉しかったのは友だちとの再会だったといいます。

父の秀一郎さんは、陸前高田で100年続くお菓子屋の5代目。しかし、事情があって店を閉めていた間に震災が起こります。そして震災後は一転、やめようと考えていた店を、まずは仮設店舗で始め、今年（2018年）4月には津波対策でかさ上げした新市街地にオープンしたのです。

父の秀一郎さんと、再建した新店舗の前で

「私も震災で弟を亡くしましたし、家も店も流されましたけど、弟の姿や以前の町は覚えています。そういう記憶を次の世代に伝えていかないと、新しいものは生まれてこない。次につなげるパイプ役でありたいと思って仕事をしています」

そんな父のことを、慶次郎さんは心から応援しています。

「父は仮設店舗でも頑張っていたし、何もなくなった町で、もう一回店を始めるのはすごいなと思った。開店して数日で1000人以上のお客さまが来てくださいました。毎日、夜遅くまで働いているから、ただ頑張ってのひと言です」

陸前高田ではいま、10mほどかさ上げした上に、新しい町が生まれようとしています。秀一郎さんのお菓子屋を含めて、まだ数軒の店しかありませんが、それぞれが表に創業年を掲げました。

「この下に本当の町があった。その当時、来てくれていたお客さんがいて、これまでの何代かがいて、いまがある。創業年は、突然始まった町じゃないんだよ、という皆の自負ですよね」と秀一郎さん。

その店を継ぐため、慶次郎さんの兄が修行中です。次男の慶次郎さんは、「父は、自分には好きなことをやれといってくれます。だからこそ、責任を持って将来のことを考え、頑張らないといけないなと思っています」

子どもたちから「ありがとう！」

1日1日を大切に過ごしていきたい

全国の募金者の皆さんへ

私は、この春から高校生になります。しかし、私の家庭には経済的な余裕がなく、「両親に負担をかけてしまうのではないか」と不安に感じていました。そんな時に、皆さんから支援をいただけるというお話を聞き、とても嬉しかったのを今でも覚えています。両親もとても喜んでいました。今回、このような機会を与えてくださった皆さんにとても感謝しています。本当にありがとうございました。皆さんに支援していただくからには、3年間の高校生活を決して無駄にしないよう、1日1日を大切に過ごしていきたいと思います。そして、社会人としての自覚を持って行動し、正しいマナーを身につけることができるよう、有意義な高校生活にしたいです。

（宮城県気仙沼市・高1・女子）

当たり前のように流れている日常の尊さ

東日本大震災から7年の月日が過ぎました。もうこんなに時が流れたという実感があまりわきません。思い出されるのは、震災によってたくさんの人が苦しんでいたということと、当たり前のように流れている日常の尊さを思い知ったということです。多くの人々が被災し、住むところを失いました。その中で、少しずつ復興していくことができたのは、私たちにとってかけがえのないものになりました。

（福島県大熊町・高2・男子）

子どもたち ご家庭 「ありが

今は悲しみも私の一部として

私は将来、看護師になりたいと考えています。高校では必要な知識を身につけ、看護師への理解を深めるための勉強をしたいです。震災から7年が経ち、当時小学2年生だった私も春から高校生になります。7年間、たくさんの方々の支えがありました。津波は家も家族もふるさとも海へ連れ去ってしまったけれど、今はその悲しみも私の一部として前を向くことができます。それは全て皆さんのくださった温かい心のおかげです。また春から新たな場所で頑張れるよう、今は受験勉強を頑張ります。本当にありがとうございました。

（岩手県陸前高田市・中3・女子）

この度は、奨学金を送っていただき、ありがとうございます。また、事業に賛同する全国の企業・団体・個人の方々からの募金にとても感謝しています。

先日、第一志望の高校に合格し、入学しました。

今はとても楽しい高校生活を送っています。私がこんなにも充実した生活を送れるのは、みなさんの募金のおかげです。これからは、その募金によって成り立っている奨学金を大切に、大切に使っていきたいと考えています。

これからもよろしくお願いします。

いただいた奨学金は制服、教科書、定期券などに。高校で勉強と部活を頑張ります。

いただいた奨学金で、制服、教科書、参考書、通学用定期券を買ったり、修学旅行代などにあてたいと思います。いただいたお金を大切に使わせていただきます。勉強では、よい点数と順位をとれるように、部活では県大会に行けるように日々頑張ります。募金を給付していただき、ありがとうございました。

（宮城県気仙沼市・中3・女子）

人を笑顔にできる仕事に就きたい

私の家は、津波の被害にあい、低所得世帯でもあります。そのため、高校へ進学することが難しい状態でした。しかし、就学支援をしていただき、高校に進学することができました。私は将来の夢がまだ決まっていませんが、たくさんの人を笑顔にできる仕事に就きたいと思っています。そして、今までお世話になった人や、支援してくださった皆さまに恩返しをできるよう、努めていきたいと思います。そのためにも、まずはたくさんの方々に支援していただいたことを忘れずに高校での勉強に励み、夢を見つけていきたいです。本当にありがとうございました。

（宮城県気仙沼市・中3・女子）

ちから、
から、
とう！」

保護者から
お礼のメッセージ

この支援がなければ部活もできなかった

現在高校3年の息子の高校入学時にあわせて、毎月2万円ずつご支援いただき大変ありがとうございました。おかげさまで、この3年間、学校を休むことなく、中学時代からやっているテニスも続けることができ、想い出を築くことができた高校生活でした。この支援がなければ、部活もできなかったと思います。本当にご支援者の皆さまに対しまして感謝申し上げます。このような支援で将来を担う子どもたちが明るい未来を切り開けるように、今後も困窮している学生たちに対して支援を継続していただきたいと思います。子どもたちの沢山の才能を開花できる支援策だと思います。（宮城県亘理町）

社会の中で貢献できる人間になってほしい

このたびは、3年間に渡り奨学金を支給していただきありがとうございました。中学3年生から高校受験を前にしての支援は本当に助かりました。息子が選んだ高校は、文武両道をモットーにしており、部活と勉強を一生懸命頑張るようになり、成績も少しずつ伸びています。これから息子の生き方の中で、多くの方々に支えられ、助けていただいたこと、日本ユネスコ協会連盟の方と関わり合いが持てたことを誇りに思っています。人間は、一人でなく社会の中で助けられて生きています。いつの日か、彼も社会に貢献できる人間になってほしいと願っています。（福島県双葉町）

生活が落ち着いたら恩返ししたい

この度、息子が念願の高校へ入学することができました。ユネスコ協会、募金者の皆さまのおかげで無事に入学手続きを済ますことができましたこと、心より深くお礼申し上げます。震災で被災し、多額の支払いがまだある中、高校進学の準備は容易なことではなく、夫婦で「助かったね。うちでも生活が落ち着いたら誰かの為に、恩返ししようね」と話しております。また、息子にも、スポーツ、勉強、資格取得にはお金がかかるが、手助けしていただいていることを話し、中途半端な気持ちではなく、一生懸命がんばるよう話しております。安心して高校生活を送れるようサポートしてくださり、本当にありがとうございました。

（宮城県気仙沼市）

多くの方々の祈りに感謝

このように私たちの子どもたちが奨学金をいただくということは、どれだけ多くの方々の祈りが込められているかと思わされます。ありがとうございます。7年前の東日本大震災の直後は非常な悲しみと、負の感情に打ちのめされていました。しかし今は、希望を感じています。福島県大熊町の自宅周辺もきれいに整備されてきており、数年後には、避難指示が解除されるのではないかと思われます。大熊町は滅びたのではないと思います。これから復興していく可能性を信じたいです。今までのご支援に感謝し、私たち保護者も、また子どもたちも、一人一人の希望を胸に抱いて歩んで行けたら幸いです。（福島県大熊町）

支援のおかげで乗り越えられた

3年間のご支援、誠にありがとうございました。おかげさまで、中学、高校と充実した学校生活を過ごすことができました。高校3年生となり、これからは自分の将来をしっかりと考え、勉強や進路に真剣に取り組んでいってもらいたいと思います。震災から7年いろいろなことを乗り越えて来られたのも、たくさんの方々のおかげだととても感謝しております。どうぞ、これからも、支援を必要としている方の力になってください。（福島県浪江町）

ご支援が大きな支えになりました

震災から7年になり、6回目の移動先でやっと一昨年に住居を確保しましたが、いまだに故郷での生活が忘れられず心が痛みます。皆さまからのご支援が私たち家族にとっては本当に大きな支えになりました。心より感謝し、お礼を申し上げます。3年間ありがとうございました。（福島県大熊町）

被災地のいま

福島県 大熊町

①今後、町役場や商業施設が建てられ、復興拠点となる大川原地区。
現在復興工事が進行中
②避難先で立ち上げた小学校で読書に勤しむ子どもたち
③「教室に笑いを」を合言葉に「教育と笑いの会in大熊」を開催。小ばなしや落語、シンポジウムを行い、避難生活の疲れを笑いで吹き飛ばしている

教育現場の声

貴協会連盟からの奨学資金ありがとうございます。東日本大震災・原発事故で避難生活が続く中、その温かいご支援は中学生、保護者の背中を力強く押していただいております。改めて感謝を申し上げます。

さて、全町避難を余儀なくされ8年目になります。避難直後、会津若松市の全面的な応援をいただき、再開できました当町の幼、小・中学校も、保護者の仕事等の関係で子どもたちの数は708名(再開時)から34名(今年度)まで減少しました。子どもたち、保護者には厳しい状況が続いています。こうした中でも、子どもたちは周囲への感謝の心を大切に、気候・風土の異なる地で前を向いて生活してきました。

走り続けてきた子どもたちの心にも疲労の兆候が見られるようになった昨年度から、「教室に笑いを」を合言葉に、意図的に笑いを導入しました。「笑う門には福来る」です。先生方には「一時間の授業で子どもたちを一度も笑わせなかったら逮捕する」と厳命(?)しました。1年が経ち、子どもたちには笑顔が増加。これからも笑いを大切にし、少々の辛いことは子どもたちとともに笑い飛ばしていこうと考えております。

大熊町教育委員会　教育長
武内敏英

宮城県 気仙沼市

気仙沼市の震災復興計画のキャッチフレーズ「海と生きる」。
市民が選んだこの言葉に支えられ、町のシンボル気仙沼漁港は復興を遂げ、
震災後も生鮮カツオの水揚げ量は日本一を誇ります。水産加工場や店舗も再建されました。
一方で、土地の区画整理の工事はいまなお続いており、更地のまま土肌が目立つエリアもまだ残ります。

①気仙沼市は生鮮カツオの水揚げが21年連続で日本一。港の復興はかなり進んだ　②震災遺構としての保存が進む気仙沼向洋高校。校舎の4階まで津波が押し寄せた
③区画整理の工事が進行中の漁港周辺エリア　④復興公営住宅は全戸完成した

岩手県 陸前高田市

広大な市街地が津波によって消失しましたが、着々とかさ上げ工事が進んでいます。
新市街地にぽつぽつと店舗が建ち始め、公園では子どもたちの笑い声が絶えません。
昨年オープンした商業施設には、周辺の復興公営住宅などから大勢の人が集まるようになりました。
新生・陸前高田はこれからです。

①屋上まで津波にのまれ、この春閉校した旧気仙中学校の被災校舎。震災時、生徒と先生は避難して皆無事だった。
　気仙中学校と第一中学校はこの春統合して「高田第一中学校」として開校し、新たな歩みを始めている
②見渡す限りだだっ広いかさ上げ地帯が続く。これから町がつくられる
③約10mのかさ上げ地帯に新市街地がつくられ、図書館やカフェを併設した商業施設が新しいコミュニティの場として機能している
④ここに名勝、高田松原があった。津波に耐えた「奇跡の一本松」の向こうには高さ12.5m、全長2kmの巨大防潮堤が建設中だ

MUFG・ユネスコ協会　東日本大震災復興育英基金

子どもたちが豊かな未来を描けるように

■ 奨学金事業

概要

三菱UFJフィナンシャル・グループ（MUFG）と協働して標記基金を創設。

対象者　東日本大震災発生時に災害救助適用地域に居住しており、両親もしくはいずれかの保護者が死亡・行方不明となった子どもで小学校から高校に在籍していた児童生徒。
（2012年～2014年の4月に小学校に入学した児童も対象）

給付金額と期間　奨学生一人あたり一時金10万円＋月額2万円を高校卒業まで給付。

2017年度の支援

2017年度は継続給付を行い、104名の奨学生が高校を無事卒業し、奨学金の給付を終えました。
（新規奨学生の募集は2014年度の小学1年生の募集をもって終了しました）

受給者数　666名　　**2017年度奨学金給付額**　1億5980万円

2011～2017年度までの累計受給者数　1484名

敢闘賞をいただきました。小学校最後の年も野球がんばります！（宮城県・小6）

「宮城丸」という実習船で石巻港から東京湾まで航海実習をしました。（宮城県・高3）

■ 心豊かな成長プログラム

子どもたちの豊かな心を育むことを目指し、TOMODACHI・MUFG国際交流プログラムを実施。
南カリフォルニアの高校生20名を日本に招待し、被災地の生徒たちと交流、異文化理解を深める機会となりました。

■ 奨学生から「ありがとう！」

いま、準六段です。
今年中に準七段になれるよう努力します。
（岩手県・中1・女子）

図書委員会の活動を頑張りたい

僕は今年6年生になります。だから勉強や部活もより大へんになると思います。その中で僕が特に頑張りたいと思っている事は図書委員会の活動です。5年生から図書委員会に入っていて、図書室のカウンターの管理などをしているのですが、学年ごとに1年間で読む本の目標冊数があります。昨年はどの学年も一人は目標冊数に到達できなかった人がいました。今年はお勧めの本を集めたコーナー等を作ってみんなに本の面白さを伝えたいと思います。そして大人になってもみんなに本を読み続けてもらいたいので、図書委員会の活動を頑張りたいと思います。

（岩手県・小6・男子）

3つの目標

学校で3つの事を特に頑張りたいです。
一つ目は部活です。今、僕は野球部に入部しています。今年の中体連は地元開催という事で4つの学校が県大会へ進むことが出来ます。そのチャンスを生かせるように日々頑張っていきたいです。
二つ目は勉強です。昨年は数学と英語を苦手としていましたので、今年は普段やテスト前にしっかりと復習をして克服したいです。
三つ目は生活面です。僕は今年学級委員長をすることになりました。しっかりと学生生活を送り、クラスの皆をまとめられるよう頑張りたいです。

（福島県・中2・男子）

受験勉強頑張りました。
受かってよかったです！
（宮城県・高1）

生徒会や部活で充実した日々

生徒会副会長、部活動の部長として日々充実した学校生活を送っています。部活動は残り一か月あまりとなり、その後は高校受験に向けてますます勉強を頑張ろうと思います。今日は亡くなった父の51回目の誕生日です。「おめでとう」と顔をみて言えないことが悲しいですが、いつもそばで見守ってくれていると思います。これからも色々チャレンジしていきたいと思います。

（宮城県・中3・女子）

祖母の手伝いを頑張っています

朝と夕方の2回、祖母の和牛繁殖業を手伝っています。今年の冬は寒かったので、子牛が死なないように工夫して暖かくするのが苦労しました。将来は祖母の牛の世話を手伝う仕事に就きたいと心の中で思っています。勉強を頑張って畜産関係、薬学関係に進学しいずれは地元で祖母の手伝いをしたいです。

（岩手県・高3・女子）

姉弟、仲良しです！
（宮城県・高1、小5）

■ 卒業生と保護者から「ありがとう！」

多くの支援があって今の私がある

今年は震災から7年目、あの日を思い出す機会も減ってきているなと思います。しかし決して忘れてはいけないと思っています。あの日から多くの方々に支援されて今の私があり、郷里が復興へと進んでいるからです。父を亡くし、経済的に大学進学などありえない私が、大学へ進学することが出来るのもご支援があってのことです。そのことはしっかり心に留め、これからの大学生活を一生懸命頑張りたいし楽しみたいです。

（岩手県・女子）

社会人として立派に生活したい

長い間ご支援ありがとうございました。この三年間の学校生活で勉学はもちろん、苦しかったことや楽しかったことなどいろいろ体験し、この春卒業を迎えることが出来ました。私の進路は就職で、新しい場所で生活することとなります。もうすぐ社会人になりますがまだまだ未熟で世間知らずです。自分が働く会社では様々な事にチャレンジして社会人としても能力を高めていきたいと思っています。たくさん物事を知り一人の社会人として立派に生活したいと思います。今までありがとうございました。

（岩手県・男子）

息子の背中を押してあげたい…

毎年あたたかいご支援ありがとうございます。息子はお陰さまで今年も無事進級し、高校3年生になりました。今が青春というのでしょうか、将来についてとても悩んでいるようです。親として少しずつ大人になっていく息子に何ができるのだろうか、背中を押してあげたい…。毎日このような思いで過ごしております。子育ての期間は一生のうちで短いけれど、重要で幸せな時間でもあります。この貴重な時を父子は10年しか共にできなかった事を今でも考えてしまいます。息子は心優しい子に育っています。人と人との輪を大切にし、社会に貢献できる大人になってほしいです。

（母）

孫育てはまだまだ長い道のり

早いもので震災から7年が過ぎ、ようやく新しい地域にも溶け込み、普通に近い生活が送れるようになってきたと思っています。孫たちも随分と成長しました。孫育てはまだまだ長い道のりがありますが、健康に留意し頑張っていきたいと思っています。これからもどうぞよろしくお願い致します。（祖母）

第４回

アクサ ユネスコ協会減災教育プログラム

＼学ぼう／

東日本大震災の記憶と経験を、全国の学校防災につなげる。

いつどこで発生するかわからない自然災害。地域の重要な防災拠点となる学校の防災力向上を目指し、助成金、教員研修会、活動報告会という3つのサポートを通じて、防災・減災教育を支援しています。

助成活動　日本全国に減災の輪が広がっています。

2017年度の実績

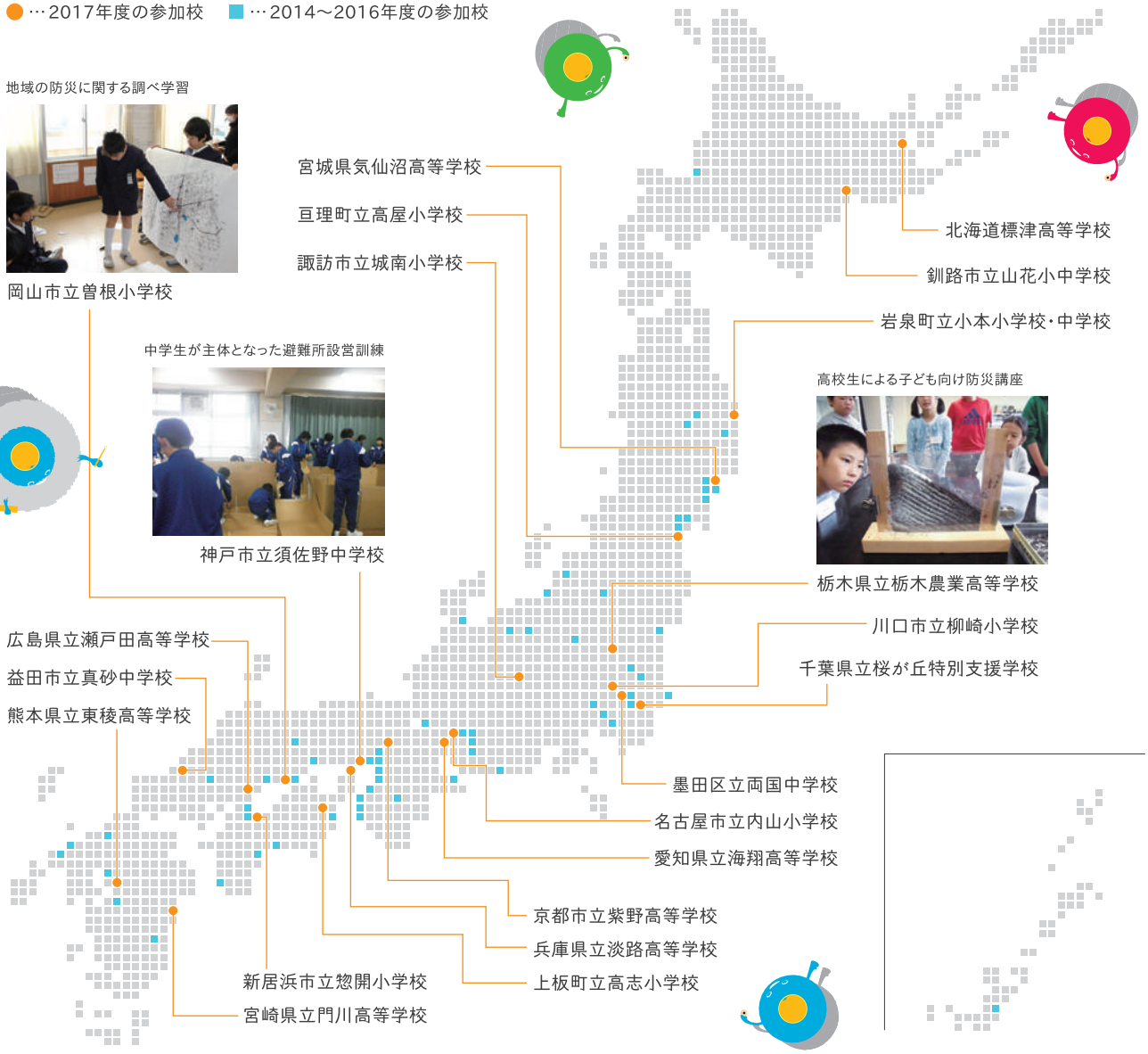
- 助成校：22校／教員研修会に参加した先生：34人／助成活動に参加した児童・生徒：5075人
- 助成活動に参加し携わった先生および活動に参加した保護者・地域住民・関係機関など：4035人
- 本プログラムを通じた減災教育に参加した人：**計9110人**

●…2017年度の参加校　■…2014～2016年度の参加校

地域の防災に関する調べ学習

中学生が主体となった避難所設営訓練

高校生による子ども向け防災講座



4年間の累計実績

- 助成校：84校／教員研修会に参加した先生：127人／活動に参加した児童・生徒：1万9134人
- 助成活動に参加し携わった先生および助成校活動に参加した保護者・地域住民・関係機関など：1万3084人
- 本プログラムを通じた減災教育に参加した人：**計3万2218人**

教員研修会　被災地から防災・減災教育を学ぶ

2017年9月18日（月・祝）～20日（水）／宮城県気仙沼市・岩手県一関市／参加教員：助成校22校・34名

〈1日目〉減災教育の基礎と理論／減災教育カリキュラムの開発手法と実践／減災教育推進のためのネットワーク構築の意義と方法
〈2日目〉授業視察：小学校における防災教育・中学校における防災教育／被災地域・被災校舎視察／高校における防災教育の展開
〈3日目〉気仙沼市教育長による講話／昨年度助成校のその後の取り組み／ワークショップ：研修成果の共有と今後の展望

【コーディネーター兼講師】東京大学 海洋アライアンス 海洋教育促進研究センター 主幹研究員 及川幸彦先生（日本ユネスコ国内委員会委員）
【研修協力】気仙沼市教育委員会／気仙沼市立階上（はしかみ）小学校／気仙沼市立階上（はしかみ）中学校／特定非営利活動法人SEEDS Asia
【講　　師】気仙沼市教育委員会 教育長 齋藤益男氏／特定非営利活動法人SEEDS Asia アドバイザー 上田和孝先生／気仙沼市立面瀬小学校 教諭 熊谷久恵先生
和歌山市立高松小学校 校長 西川厚子先生／宮城県多賀城高等学校 校長 佐々木克敬先生／階上（はしかみ）観光協会 会長 辻 隆一氏

①気仙沼市の階上小学校で防災復興マップづくりの授業を視察　②津波の爪あとがいまも生々しく残る気仙沼向洋高校の校舎内部。3階には自動車が流れ込んだ
③階上中学校の生徒会の皆さんと参加した先生とが対話

活動報告会　多様な各地の取り組みを知る

●HPに参加校の実践報告を掲載●
www.unesco.or.jp/gensai/

2018年2月23日（金）／東京都港区 アクサ生命本社／参加教員：助成校22校・22名

- 助成校による実践発表
  映像から学ぶ減災教育に必要な視点
  防災教育の今後の展開（文部科学省）
- ワークショップ：
  東日本大震災の教訓を全国の減災教育につなげる

【コーディネーター兼講師】及川幸彦先生
【講師】上田和孝先生
文部科学省 初等中等教育局健康教育・食育課 防災教育係長 中鉢晶子氏

研修を受講して減災教育への意識を高めた先生方が、
日本各地の学校の減災教育を変える力に――。
日本各地で、子どもたちを主体に、
地域と連携した新しい減災教育の取り組みが広がっています。

主　催
公益社団法人日本ユネスコ協会連盟

協　力
アクサ生命保険株式会社

コーディネーター
東京大学海洋アライアンス 海洋教育促進研究センター
及川幸彦　主幹研究員

アクサ ユネスコ協会 減災教育プログラムは、
NGO（NPO）、企業、大学、行政、学校などの
多様なセクターが連携して実施しています。

研修協力
特定非営利活動法人SEEDS Asia

研修協力
気仙沼市教育委員会

研修協力
被災地の学校

後援：文部科学省

子どもたちの学びを支える支援の輪

日本ユネスコ協会連盟が行う教育復興支援活動は、
以下の企業・団体をはじめとする多くの皆さまから温かいご協力をいただいております。
この場をお借りして、改めて御礼申し上げます。

あいおいニッセイ同和損害保険株式会社

アクサ生命保険株式会社

旭酒造株式会社

NTTドコモグループ

オリックス米国財団

一般社団法人 銀座通連合会

グッチ ジャパン

株式会社健康第一調剤薬局

株式会社光明工事

三州ペイント株式会社

株式会社JUN

JXTGエネルギー株式会社

株式会社生薬高度利用研究所

ジョルジオ アルマーニ ジャパン株式会社

雑司ヶ谷鬼子母神堂

株式会社Tポイント・ジャパン

東レ株式会社

栃木ひいらぎ

株式会社トランスコンテナ

トレンドマイクロ株式会社

南部化成株式会社

日本農産工業株式会社

一般社団法人 日本の伝統を守る会

株式会社フェドラ

フォーエバーリビングプロダクツ ジャパン

ブルーチップ株式会社

株式会社ベルセレージュ本社

復興支援
東北の物産販売
高校生プロジェクト
in岩見沢

北海道岩見沢市内高校5校
（岩農、岩東、緑陵、岩高養、岩西）

株式会社ほるぷエーアンドアイ

株式会社マルヨネ

株式会社三菱UFJフィナンシャル・グループ

三菱UFJニコス株式会社

力士会

※50音順・敬称略

ご協力いただいた皆さま

個人募金者の皆さま

全国の個人募金者の皆さまからも、
多大なご支援をいただきました。

企業・団体の皆さま

上記でご紹介しきれなかった企業・団体の皆さまからも、
たくさんのご協力をいただきました。

子どもたちから子どもたちへ

幼稚園から大学まで、子どもたちや学生の方々からも、
東北の子どもたちのために心のこもったご寄付が寄せられました。

ユネスコ協会・ユネスコクラブ・会員の輪

日本各地のユネスコ協会・クラブも継続した支援活動を行っています。
また、維持会員・賛助団体会員・個人会員の皆さまからも、
ユネスコ精神のもと、温かいご協力が集まりました。

会計報告

東日本大震災子ども支援募金事業（2017年4月1日～2018年3月31日）

①ユネスコ協会就学支援奨学金

（単位：円）

項　　目	金　　額
前期繰越	425,715,133
寄付額	111,245,564
支出額	163,546,507
奨学金	143,880,000
事業経費	19,666,507
次期繰越	373,414,190

※ユネスコ協会就学支援奨学金は、原則として、奨学生1人につき3年間にわたって支援します。
※次期繰越金は、2016年度に採用した奨学生の3年目分の給付に係る事業費用および2017年度に採用した奨学生の2～3年目分の給付に係る事業費用、そして2018年度に新規採用する奨学生の3年間分の給付に係る事業費用などを含む2018年度以降の本奨学金事業に使用されます。

②MUFG・ユネスコ協会 東日本大震災復興育英基金

（単位：円）

項　　目	金　　額
前期繰越	1,044,419,305
寄付額	0
支出額	172,880,000
奨学金	159,780,000
事業経費	13,100,000
次期繰越	871,539,305

※MUFG・ユネスコ協会 東日本大震災復興育英基金は、2014年度まで新小学1年生を募集し、奨学生が高校を卒業する2025年度まで継続されます。
※次期繰越金は、2025年度までの本奨学金事業に使用されます。

③減災教育、相撲場等

（単位：円）

項　　目	金　　額
前期繰越	1,000,919
寄付額	16,500,000
支出額	16,065,035
次期繰越	1,435,884

※相撲場支援等、年度をまたいで支援が完了するものがあります。次期繰越金は、それらに使用されます。

※当会計報告は、日本ユネスコ協会連盟が公認会計士および監事による監査を受けた計算書類をもとに、個別の活動のようすをわかりやすくお伝えするためにまとめたものです。

子どもたちの明日を支える奨学金

東日本大震災 子ども支援募金

ユネスコ協会 就学支援奨学金

子どもたちが未来に夢を描けるよう、私たちは支援を続けてまいります。
皆さまからの募金で子どもたちへの奨学金が継続できます。
引き続き皆さまのご協力をお願いいたします。

〈 日本ユネスコ協会連盟へのご寄付は、寄付金控除などの対象になります 〉

銀行振込での募金

以下の「ユネスコ協会就学支援奨学金」の
募金専用口座までお願いいたします。

三菱UFJ銀行 神田支店（普通）0297275
シャ）ニホンユネスコキョウカイレンメイ

※領収書が必要な方は、大変お手数ですが、日本ユネスコ協会連盟までご連絡ください。

インターネットからの募金

ホームページからクレジット決済による
募金をお申込みいただけます。

ユネスコ　検索

unesco.or.jp

毎月の継続的な定額募金『月1・いいことプログラム』

クレジットカードの場合

ホームページから直接お申込みいただけます。

月1いいこと　検索

unesco.or.jp

口座振替の場合

口座振替申込書をお送りします。
お手数ですが、ご希望の方は
当協会連盟までご連絡
いただきますようお願いいたします。

お問い合わせ・連絡先

〒150-0013　東京都渋谷区恵比寿1-3-1　朝日生命恵比寿ビル12階

公益社団法人日本ユネスコ協会連盟

TEL:03-5424-1124(9:30～17:30／土・日・祝日を除く)　FAX:03-5424-1126　メール:nfuaj@unesco.or.jp

日本ユネスコ協会連盟

仙台からはじまり、世界に広がった民間ユネスコの輪

第2次世界大戦後間もない1947年、「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」と謳うUNESCO（国際連合教育科学文化機関）憲章の理念に共鳴した人びとにより、世界初の「民間ユネスコ協力会」が仙台に誕生しました。その後の1951年、日本がUNESCOへの加盟を果たした後も、民間ユネスコ組織は全国に根を広げていきました。2018年8月現在、日本には278のユネスコ協会・クラブがあり、国内外でさまざまな活動を直接実施しています。

さまざまな活動

私たちは、SDGs（Sustainable Development Goals：持続可能な開発目標）の担い手として、「教育を通じた平和な世界への貢献」を目指し、東日本大震災子ども支援のほかにも、さまざまな活動を行っています。

世界寺子屋運動

“きょういくで、
あしたへいく”

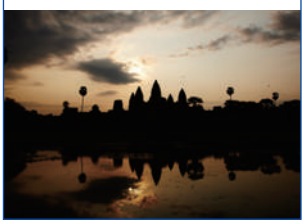
カンボジア、アフガニスタン、ネパール、ミャンマーで、学校に通えない子どもや読み書きができない大人たちに、学びの機会を提供。貧困のサイクルを断ち切り、明日を生きる力を育てます。

未来遺産運動

“日本のこころを、
あしたへ伝える”

100年後の子どもたちに、日本の大切な自然や文化を伝えたい。そんな思いから、日本各地の市民による保全・継承活動を「プロジェクト未来遺産」として登録し、応援します。

世界遺産活動



“人類共通のたからものを
守り伝える”

世界の貴重な文化や自然を人類共通のたからものとして、次世代に伝える活動を行っています。カンボジアのアンコール遺跡群では修復事業や人材育成を行っています。

青少年育成活動

“つなげよう平和の心”

ユネスコ協会ESDパスポート、子どもキャンプ、海外スタディツアー、出前授業、活動助成など、地域や学校と連携して次世代の育成を行っています。

公益社団法人
日本ユネスコ協会連盟

〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿1-3-1 朝日生命恵比寿ビル12階
TEL：03-5424-1121　FAX：03-5424-1126
http://www.unesco.or.jp　E-mail：nfuaj@unesco.or.jp

2018年8月発行